

◆平成24年度新指定文化財◆

相撲呼出し裁着袴製作

江戸切子(ガラス工)

木下川やくしみち道標 宝暦11年在銘

江東区教育委員会は、文化財保護審議会(会長 松平康夫:元東京福祉大学教授)の答申を受け、新たに3件を指定、3件を登録しました。また、登録7件を解除したため、登録文化財の総数は1051件となりました。



木下川やくしみち道標



相撲呼出し裁着袴



江戸切子(ガラス工)

下町文化

NO. 261
2013.4.26

発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
<http://www.city.koto.lg.jp/>

○平成24年度新指定・登録文化財紹介

○城東の村を歩く④

大島村

○江東歴史紀行

深川鶴歩町と人足寄場

○時雨忌記念講演会録

「小澤幹雄のやわらかクラシック ～芭蕉のこと、 兄征爾と音楽のこと～」

○江東区芭蕉記念館「江戸開府四百十年」企画展

◆江戸と文芸―都市に集う文人たち―

◆風景漫画家沖山潤の描く「芭蕉の深川」

○新刊案内

身近な「歴史」に関心を

いよいよ春本番です。桜は散ってしまいましたが、外を歩くにはちょうどいい季節です。清々しい空気の中、ゆっくりに、じっくりと町を「探検」するのも楽しいひと時といえるでしょう。

なんとなく歩くだけでも、普段歩くことのないお寺や神社、路地などに入れば、新しい発見があるはずです。最近、歴史や文化財に関心を持つ方も多いようで、文化財係としては、心強い限りです。

さて、近所を歩くことで、身近な地域の歴史を知ることができます。その重要な手掛かりが文化財で、指定・登録されたものだけでも、区内各所に千件以上もあります。もし、道端に石造物を発見した時、難しいことを考える必要はありません。いつ頃、何のために造られたのか、なぜ現代に残されているのかなど、多少の疑問を持ちつつ、昔の「世界」に想いを馳せていただければ十分です。より詳しく知りたい方は、『江東区の文化財』(全8冊)がありますので、ご参照いただければと思います。

昨年度も新たな文化財が指定・登録されました。詳しくは2・3ページに記しましたので、ぜひ一読ください。

指定文化財

【有形民俗文化財】

木下川やくしみち道標 きねがわ どうひょう 宝暦11年在銘

亀戸3-39 境橋橋台地 祐天堂

木下川やくしみち道標は、北十間川に架かる境橋から木下川薬師堂（葛飾区）へ至る木下川薬師道を示す道標です。道標の左側面には「あつまもり」（吾妻権現社、現吾嬭神社、墨田区）の刻銘があります。同社が境橋を渡って東に進んだところに位置し、木下川薬師堂方面に向かって右手にあることから、道標は設立当初からほぼ現在の位置に南西を正面にして所在していたと思われる。

木下川薬師堂は、青竜山浄光寺と号する天台宗寺院で、本尊を薬師如来とし、貞観2年（860）に円仁の弟子慶寛が創建したという古寺です。天正19年（1591）に、徳川家康より朱印地5石を与えられ、享保5年（1720）以降は將軍家の御膳所にも指定された徳川家ゆかりの寺院です。また、病氣平癒に靈験を持つとして庶民の信仰を集めるほか、杜若の名所としても有名です。

本道標は、江戸時代以来、北十間川から境橋を渡って木下川薬師堂へ至る道が参詣の道としての性格を有し、江戸市中の人々に利用されていたことを示すものとして貴重な石造物です。



木下川やくしみち道標

【無形文化財（工芸技術）】
すもうよひだ たつばはかせいさく
相撲呼出し裁着袴製作

保持者 富永皓

相撲の呼出しがはく裁着袴は、「山袴」に分類されるタチツケの一種です。労働着として着用されてきたタチツケは、地方によりタツキ、タツツケ、タツツキ、タテツケとも呼ばれます。筒が極めて細く、ケマワシ（スソまわり全体の寸法）が一幅になっており、膝以下が細く、紐で結ぶか、またはコハゼ掛けとする点に特徴があります。様々な漢字が当てられますが、大相撲では「裁着」としています。

富永皓さんは、昭和10年生まれで、24歳の時に父清吉さん（明治34年生まれ）について修業し、和裁の技術を習得しました。裁着袴の製作は、昭和35年頃に、清吉さんが呉服屋から注文を受けたことが始まりです。これは、呼出しの寛吉さんからの依頼でした。清吉さんは、見本の裁着袴をほくして作り方を調べ、また寛吉さんの助言をもらいながら型紙を作り、製作しました。

皓さんは、清吉さんを手伝いながら裁着袴の製作方法を学び、37歳の頃から本格的に裁着袴の製作を始めています。平成18年、皓さんは卓越した技能者（現代の名工）として表彰されています。



富永皓氏

ガラス工（江戸切子）

保持者 須田富雄

切子とは、ガラスの生地の上に、様々な文様を刻み込む技術です。江戸では、天保年間（1830〜44）に始められたといわれます。明治期以降は、官営の品川硝子にて伝習生が学んだ技術が、以後の江戸切子の基盤となっていくます。江戸切子の特色は、生地となるガラスに深く鋭いカットを施す点にあります。江東区域は、水運

によって原材料を調達しやすいという立地から、ガラス会社や職人が多く集まっていました。

須田富雄さんは、大正13年向島（現、墨田区）に生まれ、昭和11年、堀口市雄さん（堀口硝子初代社長）に弟子入りして技術の習得に励みました。長年堀口硝子に勤務し、昭和61年には堀口さんから名跡を受け継いで、「二代目秀石」を号しています。平成2年、堀口硝子を退職、独立して工房を開き、創作活動の傍ら教室を主宰して、江戸切子の普及に尽力されています。

須田さんの師弟関係を遡ると、品川硝子の伝習生に辿り着きます。須田さんの技術は、百数十年に及ぶ江戸切子の歴史を現在に伝えているといえます。



須田富雄氏

登録文化財

【有形文化財（建造物）】

石造鳥居 大正11年在銘

亀戸3—38—35 天祖神社

天祖神社は、江戸期には「砂原神明宮」と称された柳島村の総鎮守です。

石造鳥居は、境内の太郎稲荷神社に對して奉納されたものです。太郎稲荷神社は、社伝によると、大名の立花家の守護神であつたものを、江戸末期に分祀したものとされています。



石造鳥居

【有形文化財（彫刻）】

石造狛犬 大正13年在銘 一對

木場1—5 賀来神社

賀来神社は、神田の豊後府内藩（大給松平家）の上屋敷にあり、明治5年の松平家の転居に伴い、本郷へ移転し

ました。旧賀来神社境内で事業を始めた株式会社フジクラの創業者藤倉善八は、明治23年に千駄ヶ谷に工場を設立し、本郷の賀来神社から分祀して祀りました。大正12年1月の本社移転により、賀来神社も木場に移されました。

狛犬は、同年9月の関東大震災で全焼した賀来神社を再興する過程で奉納されたもので、地域の歴史や信仰のあり方を伝える貴重な文化財です。

【有形民俗文化財】



石造狛犬

鉄造天水桶 大正11年在銘 一對

亀戸3—38—35 天祖神社

本殿前方左右に置かれており、刻銘によると、柳島砂原の18名と柳島新地の20名らによって奉納され、亀戸宇野工場鑄工小泉太助が鑄造したことがわかります。銘に「再興」とあるので、それまで使用していた天水桶が何らか

の理由で使用できなくなったために新たに製作・奉納されたとみられます。



鉄造天水桶(左)

【無形文化財（工芸技術）】

船大工 保持団体 佐野造船所

和船を造る船大工は、大工から分かれた技術です。15世紀のころ、船の大型化と製材技術の発展にともない専門化しました。江東区は、江戸時代に小名木川沿岸にあった「海辺大工町」に象徴されるように、和船や船大工との関係が深い地域です。

佐野造船所は、江戸時代から続く



すり合わせの様子

登録解除

【有形文化財（絵画）】

紙本着色両界曼荼羅図 2幅

平野1 個人蔵

【有形民俗文化財】

水盤 安永4年在銘

地蔵供養塔 元禄16年在銘

地蔵逆修供養塔 寛文12年在銘

阿弥陀三尊供養塔 寛文10年在銘

亀戸4—48—3 常光寺

水盤 剣大講奉納

富岡1—17—13 深川不動堂

【無形文化財（工芸技術）】

木工（建具） 保持者 木全章二

所在地変更（史跡）

旧葛西橋跡

東砂5—15、6—17 江戸川区

元木場跡

清澄・佐賀・福住・深川付近

大島村

大島村と上・下大島町

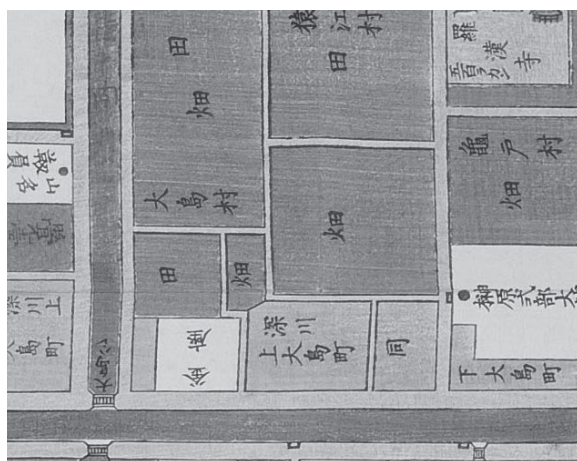
大島村は、現在の大島の町名の由来となった村で、江戸時代は小名木川北岸に位置し、西は横十間川、東は平方村、北は亀戸村などに接していました。

おおむね大島1・4丁目と2・3・5丁目の一部にあたります。村の成立年代は正確にはわかっていませんが、徳川家康の江戸入府後に開削されたといわれる小名木川の沿岸は、河川流通業者などが居住し、早くから開発が進んでいたと考えられます。そのため、大島村のうち、小名木川沿いの一部の地域（大島1・4丁目付近）は、明暦3年（1657）には商家が建てられ、宝永3年（1706）には町並地（人別は町奉行、年貢は代官が管轄する地）となり、町場化が進んで上大島町・下大島町と称されるようになりました（『新編武蔵風土記』）。このことから、大島村も明暦期以前には成立していたことがうかがわれます。

釜屋と渡し場

小名木川沿いの上大島町で有名だったのが鍋釜製造所の釜屋です。釜屋は、鋳物師いもじの太田六右衛門（釜六）と田中

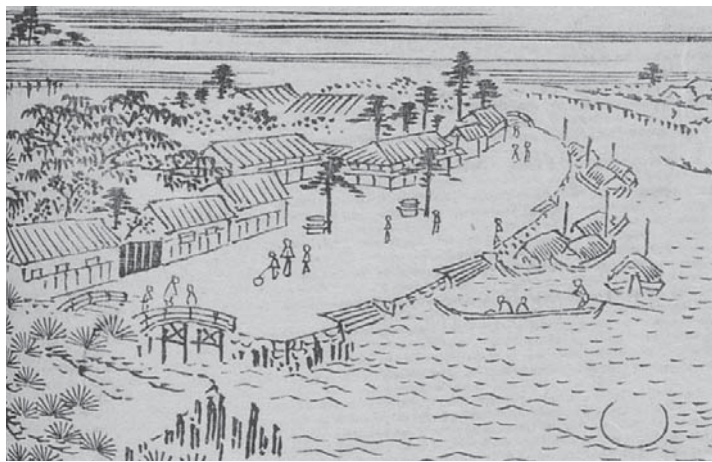
七右衛門（釜七）の家が代々営んだ工房で、享保2年（1717）には8代將軍徳川吉宗が小名木川を通船した際の焚き出し御用を勤めました。以後、御用釜の献上を行うようになり、寛政6年（1794）の小金牧鹿狩ししがりでは褒美として白銀2枚を授かりました（『御府内備考』）。



「本所深川絵図」部分

釜屋が上大島町に工場を開いた大きな理由は、江戸に近く利便性の良い小名木川の水運が活用できたことです。釜屋付近の風景を描いた『江戸名所図会』の挿絵を見ると、大きな2つの釜を置いた釜屋の目の前には、小名木川の沿岸に船の荷物を陸揚げするための河岸かしが築かれていたことがわかります。釜屋はこの河岸を利用して、材料

となる鉄を運び込み、完成した製品を出荷したものと思われます。

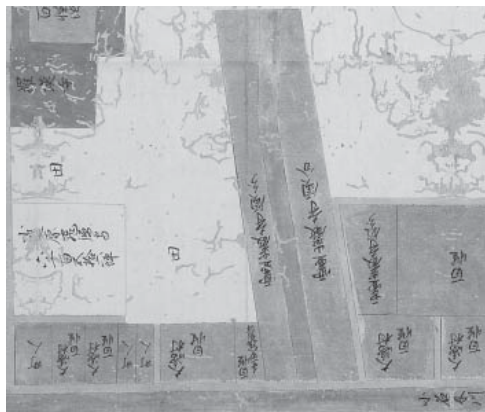


「小名木川五本松」（『江戸名所図会』）部分

また、同じ『江戸名所図会』の挿絵には、釜屋の前の河岸で渡し船が運航している様子もみられます。この渡しは、釜屋の近くにあったことから「釜屋の渡し」と呼ばれました。渡しの開設時期は不明ですが、『御府内備考』に上大島町に渡船場があったことが書かれており、文政期（1818～1830）頃には開通していたことがわかります。この釜屋と釜屋の渡しの跡地は、江東区登録史跡となっています。

靈巖寺領と念仏堂

大島村はそのほとんどが、家康の関東入国以来の御料所ごりょうしよ（幕府の直轄地）ですが、一部が靈巖寺領に設定されています。靈巖寺領は、靈巖寺が万治2年（1659）に寺領として50石を拝領した土地です。領内には、珂碩上人かせきが建立した念仏堂（開創年は不明ですが寛文8年（1668）には存立）がありました（『葛西志』）。しかし、水害で堂宇に被害が出たことから、延宝年間（1673～1681）には、奥沢（世田谷区）に什物を移転したとされ、世田谷区浄真寺（開山は珂碩上人）には念仏堂の什物として寄進された寛文8年の茶釜（釜六製）が残されています。その後、念仏堂は廃止されたようですが、その年代は不明です。



「羅漢寺・大島・平方村絵図」部分、天明元年写

深川鶴歩町と 人足寄場

池波正太郎の小説『鬼平犯科帳』の主人公として知られる長谷川平蔵ですが、日本史上では石川島人足寄場（以下、人足寄場と略す）の創設者として有名です。人足寄場は、増え続ける無宿への対策として寛政2年（1790）に創設された施設です。無宿や軽罪を犯した者などを収容し、収容者にはそれぞれ作業を課し、一定の条件を満たせば赦免されました。無宿に対する授産・更生の施設であり、無宿となった人々を村に戻すための人返し政策として設けられたものでした。人足寄場は隅田川河口にあった石川島に設けられましたが、当初その候補地として深川が挙げられていたことをご存知でしょうか。今回は、鶴歩町と人足寄場との関わりについてご紹介します。

鶴歩町の成立と変遷

鶴歩町（明治44年までは深川鶴歩町）は、平野新田の一部でした。平野新田は、元禄11年（1698）に町人持ちから御用地となり、のち大名屋敷地となりました。しかし、湿地帯のため屋敷を建てられず、宝永6年（1709）

と享保2年（1717）の二度にわたって平野町名主の平野甚四郎に土地が預けられました。享保8年、甚四郎はこの土地の新田開発を願ひ出て許され、私費を投じて整備を行い、平野新田と称しました。しかし、耕地に適さなかったため同14年に町屋とすることを願ひ出て許され、甚四郎の俳号をとって鶴歩町と名付けられました。宝暦9年（1759）頃に町域全体が上田藩松平伊賀守抱町並屋敷となり、明和6年（1769）には長州藩松平（毛利）大膳大夫に引き渡されました（『御府内備考』。慶応年間（1865～68）に上地となり（『東京府志料』、以後町場となりました。

無宿の増加と人足寄場

江戸時代の百姓や町人は人別帳に記載されていましたが、人別帳から削除された者を無宿といいます。貧窮による離村や追放刑などによって無宿となりました。無宿の増加は村の生産人口を減少させる一方、多くの無宿は江戸などの大都市に流入し、浮浪・犯罪などによって治安を脅かす存在にもなりました。無宿の増加は、村と都市の双方に関わる問題だったのです。

天明年間（1781～89）には飢饉などの影響によって多数の無宿が発生し、深刻な社会問題となっていました。これまでにさまざまな無宿対策

が議論され、また実施されましたが、問題の解決には至りませんでした。老中松平定信は、この問題を解決するための無宿の収容施設について意見を求め、これに応じたのが火付盗賊改の長谷川平蔵でした。

人足寄場起立

定信の求めに応じて、平蔵は上申書を二回提出しています。その内容は神宮文庫所蔵の「寄場起立」にまとめられています（「寄場起立」は『東京市史稿』産業篇第33に掲載。以下の引用は同書による）。上申書では、施設の名称や運営方法の他に、用地についても具体的に述べています。逃亡防止及び建設費用の節減のために、川沿いに適当な土地を求め、最初は六郷川筋（多摩川の下流）を探しましたが見つかり



「本所深川絵図」（安政五年尾張屋板）部分

ませんでした。

そこで候補地となったのが「深川松平大膳太夫抱屋敷鶴歩町」です。掲載図からもわかるように、鶴歩町は周囲を川や堀割に囲まれていました。平蔵の見立てによると、鶴歩町は二万坪の広さがあり、軽輩の住まいを除けば空地だったようです（「屋敷内軽キもの住居仕候所計家作御座候て、跡ハ不殘明地ニて鷹遣ひ申候地」。土地の造成が容易であり（「川浚被仰付候土ニて築立被仰付候とも、川続之場所ニ御座候間、如何様とも出来可仕」、船運も便利で（「大川え続き罷在、船之通用宜敷」、収容者の逃亡を防止できる（「四方川ニ御座候間、逃去申候儀相成不申」）ため、「何レ二つき候ても便り宜敷地面」と判断し、「屋敷地面絵図別紙二認」め提出しました。しかし、平蔵の用地案は採用されず、隅田川河口にある石川島が人足寄場の用地となりました。

現在、冬木（木場3の間）の平久川に架かる鶴歩橋は、かつての町名の名残を留めています。



現在の鶴歩橋

小澤幹雄のやわらかクラシック ―芭蕉のこと、兄征爾と音楽のこと―

講師 小澤幹雄(放送タレントエッセイスト)

こんにちは、小澤幹雄と申します。私は都内のカルチャースクールでこの講演と同じ「小澤幹雄のやわらかクラシック」という講座を持っています。このタイトルは、以前私がパーソナリティーを務めたFMラジオのクラシック音楽番組のタイトルでした。クラシック音楽番組なんて一年や半年の短期間で終わってしまうものが少なくないのですが、この番組には幸い熱心なリスナーが大勢ついてくださって、四年以上も続きました。タイトルは私が番組のスタート時に一生懸命考えたもので愛着がありますから、今でもこうして私が話す機会があったり本を書いたりするときには、よくこのタイトルを使います。私は芭蕉の研究をしたわけではないので、芭蕉のことはきつと皆さんのほうが詳しいと思いますが、私の考える芭蕉のことか、音楽のことや兄の小澤征爾のこともお話ししようと思ひまして、今日もこのようなタイトルとしました。

松尾芭蕉の俳句には、子供の頃から



だったと思います。

『おくのほそ道』の冒頭部分「月日は百代の過客にして行きかふ年も又旅人也」は大好きな一文で、日本語の格调の高さや品格を示す名文だと思ひます。この有名な文章を英語に翻訳した人がドナルド・キーンさん、彼はアメリカ生まれで、コロンビア大学の学生るとき『おくのほそ道』に出会い、これを英訳しようと試みたそうです。しかし大変難しく、その後1996年

に、ようやく英訳『おくのほそ道』を出版されました。日本語に堪能なキーンさんは、戦時中は日本兵捕虜の手記や手紙などを訳したり通訳をしたりしたそうです。戦後も日本文学の研究を続けてコロンビア大学名誉教授になられました。昨年、東日本大震災と原発事故に心を痛めて、とうとう大学を退官し日本へ帰化しました。「鬼怒門(きーんとんなど)」という漢字表記を使っているキーンさんは、まさに「舶来(百代?)の過客」です。そんなキーンさんが翻訳した『おくのほそ道』の冒頭はどのようなものだろう?と調べてみましたが、とても分かりやすい名訳です。

文学は、違う言葉に訳されたら、その美しさや面白さが半減してしまうのでしょうか。英国人は、「シェイクスピアの良さは、違う言語に翻訳しても伝わらない」といいます。では、芝居というものは翻訳したら面白くないかという、東京大学の英文学者、小田島雄志さんが翻訳した日本語のシェイクスピアはとても面白いものです。そして、井上ひさしさんの戯曲「数原検校」は、東北弁で駄洒落を連発する、そのテンポの面白さが格別です。この劇が、なんとエジンバラで日本語のまま上演されて大好評でした。翻訳され

ずとも、そのおかしみはちゃんと外国で大いに受けている。『おくのほそ道』もシェイクスピアも井上ひさしも、良いものは誰にでもわかるものだと思ひます。

さて、外国人でも俳句を作ろうという人はたくさんいます。その一人に、フランス人で日本語で俳句をやっている若い俳人がいます。彼は僕の友人で、長野に住んでいるローラン・マブソンさんですが、これも不思議な縁で、マブソンさんは平成二十二年のこの時雨忌記念講演会の講師をされたそうです。僕の友人が立った場所に、今日は僕が立っているわけです。マブソンさんは幼い時から詩人になるのが夢だったそうですが、交換留学で来日して、宇都宮高校へ通い、その学校図書館で初めて芭蕉を知り「詩人ではなく俳人になろう」と決心したそうです。パリ大学日本語科卒業後に再び来日し芭蕉や一茶を研究、一茶のふるさとである長野に住み着いて、俳人「マブソン青眼」として活躍しています。彼の俳句は、僕から見るとやはり日本人とは違う、フランス人らしい感性の俳句です。そしてフランス語の詩にあるように、日本語の俳句にも「韻」があるのだと、「韻」にこだわっています。

橙の花にひかれて母の海

青眼

花の「は」と母の「は」が、韻を踏んでいるのですね。芭蕉にも

荒海や佐渡によこたふ天の河 芭蕉と句頭韻が見られます。一茶もこの音調的技法を重視しているそうです。

そば咲くやその白さ、へぞつとする

一茶

マブソンさんはクラシック音楽も大変好きで、特にバッハや武満徹が好きだそうです。ですから、なおさら俳句の十七音にある言葉の響きに、美しさを感じるのでしょうか。

これは、マブソンさんが、征爾が指揮したサイトウ・キネン・オーケストラが演奏した、シヨスタコヴィッチの交響曲を聞いて作った句です。

奥山よりシヨスタコヴィッチ出でて秋

青眼

サイトウ・キネン・オーケストラとは、征爾が学んだ齋藤秀雄先生の弟子たちが先生の没後に集まって作った、オーケストラです。征爾は、この齋藤先生に指揮の基礎をすべて教わりました。実は、齋藤先生は母方の親戚に当たります。

我々兄弟四人は皆中国の旧満州に生まれましたが、戦前、北京のわが家は、いろいろな人が父に会いにきたりご飯を食べに来たりと集まる賑やかな家でした。戦争が始まる直前に一家で日本

へ引き揚げてきましたが、北京時代のわが家の常連の中には、文芸評論家の小林秀雄さんなどもおられました。日本へ引き揚げるときに持ち帰ったものの中に、アコーディオンがありました。これが征爾が最初に弾いた楽器です。

戦後になって征爾はピアノを学びました。両親は生活が苦しい時代に苦労してピアノを手に入れて、征爾も一生懸命ピアノを練習してピアニストになるつもりだったのですが、指を怪我をしたこともあり、また中学校の合唱がきっかけで指揮者を目指し、チェリストで指揮者の齋藤先生の元で指揮を学びました。大変厳しい先生でしたが、齋藤先生に学んだ弟子は、みんな一流の音楽家になっています。征爾も桐朋学園短大卒業後に海外で勉強したいと思っていました。お金が無いので、いろいろな方から資金を提供してもらい、貨物船でフランスへ渡り、ブザンソン国際指揮者コンクールで優勝したあとパリで勉強を続け、カラヤンの主催した指揮者コンクールで一位をとってカラヤンに師事、それからバーンスタインに出会ってニューヨークへ渡り、ニューヨーク・フィルの副指揮者になりました。

パリで勉強していた当時、偶然、小林秀雄さんにお会いして「僕は北京で

君のお父さんをよく知っている。あのころ、ニコニコした可愛い赤ちゃんが君だったんだね」と言われてびっくりしたこともあったそうです。今年、作家の村上春樹さんと征爾の対談集『小澤征爾さんと、音楽について話をする』が、小林秀雄賞を受賞しました。これも小林さんとの不思議なご縁だと思います。

小林秀雄さんが書かれた評論『モーツァルト』は有名ですが、クラシック音楽の評論を確立したといわれるのは、先日亡くなられた音楽評論家の吉田秀和さんでしょう。吉田秀和さんは、長くNHK-EFMのクラシック番組で音楽を紹介なさってきて、亡くなる直前まで番組収録をなさっていました。著作、翻訳も数多くあり、音楽だけでなく絵画や芸術の評論もたくさん残しておられます。吉田先生の音楽評論は本当にすばらしい文章で、その格調高い文章は、手書き原稿に何度も追加訂正の紙を切ったり貼ったりするという手作業から生まれたのだ、と、先生を追悼する番組で初めて知って驚きました。そして、なんと芭蕉も『おくのほそ道』で、同じような推敲の仕方、紙の切り貼りをしているのです。僕も字を書くことは大好きですから、新聞のコラム原稿や手紙などは今でも万年筆

で手書きです。こんなところに、松尾芭蕉と吉田秀和さんの文章へのこだわりを見つけて、僕は驚き楽しくなりました。

平成七年に『奥の細道』の芭蕉自筆本が発見されて話題になりました。

当時テレビで放送された「よみがえった自筆本・奥の細道」では、何百年も前に芭蕉が自身の手で切り貼りの作業をしたあとをみて、国文学者たちがこどものように胸をときめかせている様子も印象的でした。この自筆本には芭蕉自身による推敲のあと、書き直しの紙を貼った箇所が74もあります。特に「松島」の段は、何度も切った貼ったが繰り返されています。当然、その下から今まで知られていなかった芭蕉の文や句があったわけです。「遊行柳」の段の

田一枚植えて立ち去る柳かな
の裏側には

水せきて早稲たばぬる柳陰
という未知の句が見えてきたといいます。こういう発見からますます芭蕉の研究がされていくことでしょう。とりとめのない話になってしまいました。ありがとうございます。

平成二十四年十月七日（日）

於 江東区芭蕉記念館

江東区芭蕉記念館「江戸開府四百年」企画展

江戸と文芸―都市に集う文人たち―

風景漫画家沖山潤の描く「芭蕉の深川」

4月25日(木)～10月20日(日)まで
漫画展(11月24日(日))

徳川家康が慶長8年(1603)に江戸に幕府を開いてから今年で410年になります。芭蕉記念館では、この機会に「江戸と文芸―都市に集う文人たち」と「風景漫画家沖山潤の描く『芭蕉の深川』」のテーマから成る2つの展示会を開催しています。

開幕以降、江戸は政治都市として発展し、享保期には世界最大の100万都市として繁栄しました。庶民の文化も次第に開花し、宝暦から天明、そして文化・文政期には成熟期を迎えます。「江戸と文芸」展では、芭蕉を始め近世の俳人・歌人・狂歌師・作家・浮世絵師など93点の資料を通して、江戸という地域のもとで交流を果たした様々な文人を取り上げています。



歌川豊国画喜寿年賀錦絵

テーマの二つめは、「風景漫画家沖山潤の描く『芭蕉の深川』」です。沖山氏は、ゲームのグラフィックデザイナーとして活躍後、「月光



沖山潤作「都営新宿線森下駅」

通りのマスター」で『週間ビジネスジャンプ』(集英社)の新人賞を受賞されています。平成14年頃から下町を題材にした独特の風景漫画に取り組みようになり、繊細な描写の中にほのぼのとした漫画の持つユーモラスを加味した「風景漫画」という新しいジャンルを開拓しました。

作品は、都営新宿線森下駅柵面路グラフィックとして制作された「森下駅芭蕉の顔いろいろ」、海辺橋の川沿いにある「芭蕉俳句の散歩道」、清澄庭園内にある「芭蕉句碑」などの新作を含め30作品が並んでいます。芭蕉が深川の草庵に移り住んで以降、今も息づく「芭蕉の町 深川」にこだわった沖山ワールドをご堪能ください。

問合せ

江東区芭蕉記念館

江東区常盤 1-6-3

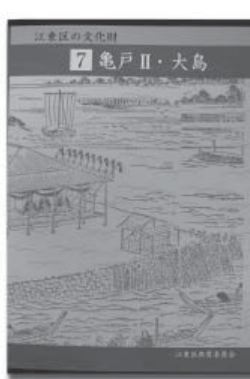
☎ 3631-1448

新刊案内

『江東区の文化財7 亀戸Ⅱ・大島』

『江東区の文化財』8冊目(最終巻)で、亀戸4～9丁目、大島1～9丁目の文化財を収録しました。これで区内全域が揃いましたので、ご案内いたします。

①深川北部、②深川寺町界隈、③永代橋界隈、④門前仲町界隈、⑤木場、⑥亀戸Ⅰ、⑦亀戸Ⅱ・大島、⑧砂町



【規格】 A4判、70頁
【価格】 500円

『江東のいまむかし』

『昭和の思い出、平成の風景』

本区では、地域の記録としての古写真を集め、寄贈を受けてきました。この古写真は、平成19年以降、区民の有志である「古写真整理プロジェクト」のメンバーとの協働事業として整理が進められています。本書は、この事業の集大成として刊行するもので、各写真の解説文や現在の風景写真の撮影などは「古写真整理プロジェクト」のメンバーが手がけています。昭和30～40年代を中心とした古写真を地域ごとに現在の風景写真と対照させて掲載して

いますので、今は消えつつある江東区のなつかしい風景に思いを馳せてみてください。



【規格】 A4判、112頁
【価格】 1,000円



木場の材木問屋(本書掲載写真)
(木場3-3・8、昭和39年)

【頒布場所】

文化観光課文化財係 (区役所4階)
こうとう情報ステーション (区役所2階)
芭蕉記念館 (常盤1-6-3)
深川江戸資料館 (白河1-3-28)
中川船番所資料館 (大島9-1-15)
深川東京モダン館(門前仲町1-19-15)

計報

・江東区登録無形文化財(工芸技術)「船大工」保持者佐野一郎氏は、平成25年2月21日にご逝去されました。慎んで、ご冥福をお祈り申し上げます。